

【三井寺】みゐでら(その1)

三井寺は滋賀県大津市、琵琶湖南西岸の長等山東麓にある古寺です。天台寺門宗の総本山で、三井寺の名は通り名、正式には園城寺[をんじやうじ]といます。

三井の名は御井、すなわち『日本書紀』天智九年(670)三月九日にある「山御井」が初見で、寺の伝承によれば天智・天武・持統の三代が誕生時の産湯とした水であるところから御井と称したということです。寺からは奈良時代前期の瓦が出土していることから旧い歴史を持つ寺であることは間違いありませんが、創建に関わる記録は伝説的な部分が目立ちます。

貞観元年(859)智証大師円珍が園城寺の前身と思われる大友氏の氏寺を延暦寺別院として再興し、同八年同寺別当、同十年天台座主に任じられました。最澄より始まる天台宗一門は最澄没後に、延暦寺を拠点とする円仁派(山門派)と園城寺を拠点とする円珍派(寺門派)に分裂し各寺の座主職・戒壇独立問題などの利害関係をめぐり長く流血の抗争を繰り返すこととなりました。

平安中期以降は奈良法師(興福寺)・山法師(延暦寺)・寺法師(園城寺)と称され僧兵による兵力が充実していました。平家打倒を志す以仁王が園城寺を頼ったのは、源頼義が前九年の役の戦勝祈願をして以来、寺と源氏の結びつきが強かったためでしょう。

「細波の・細波や」は琵琶湖南西岸部、大津の宮・志賀・長等・三井・比良の枕詞です。淡海(琵琶湖)の景色を思わせる美しい枕詞ですね。

園城寺すなわち三井寺は近江八景の一つに数えられます。近江八景とは中国湖南省にある洞庭湖付近の瀟湘八景[ショウショウハツケイ]を真似たもので、琵琶湖南部の景勝地を採り上げたものです。近衛政家(1444-1505)の選定ともいわれ、三井の晩鐘・唐崎の夜雨・堅田の落雁・粟津の晴巒・矢橋の帰帆・比良の暮雪・石山の秋月・瀬田の夕照がそれにあたります。

三井の晩鐘とは三井寺の鐘のことで、「背東大寺、成平等院、声園城寺」〔鐘の大きさは東大寺、形は平等院、音色は園城寺〕といわれるほど有名な鐘だったようです。

音色の優れた三井寺の鐘は俵藤太(藤原秀郷)が大ムカデ退治のお礼に竜神からもらったものという伝承があります。俵藤太は平貞盛と共に平将門を打った武将です。

三井寺の鐘には更に弁慶の引き摺り鐘の伝承があります。

寺門と山門の抗争の中、三井寺に攻め入った叡山の僧兵武蔵坊弁慶は三井寺の鐘を奪い、引き摺って叡山に持ち帰り講堂に吊るしました。ところが鐘を突いても鳴りません。

強いて鳴らすと三井寺に帰ろうと泣くので、怒った僧兵が谷から落とし鐘は割れてしまいました。後に和睦して割れた鐘は三井に返されましたが、小さな蛇が尾で叩いたところもとの姿に戻ったということです。この伝承にはバリエーションが他にもあるようです。

茶道具の世界にも「園城寺」の銘は響いているようです。

園城寺釜は肩に園城寺の陽刻文字がありますが、その謂われは不明です。

この釜と同じく東京国立博物館蔵に竹一重切花入銘「園城寺」があります。

ご承知の通り利休が秀吉の小田原攻めの陣中見舞の際作ったものと伝えられ、尺八・夜長と共に竹花入の始まりといえる侘道具です。三作とも葦山の竹と云えられますが竹質の違に疑問が残ります。

私は、夜長は花所望・花寄せ用の花入で、尺八は水屋用花入、一重切は花運搬用の通い筒の一式を表道具に仕立て直したのではないかと考えています。

園城寺の銘は少庵による銘です。花入背面に「園城寺 少庵」と彫られています。銘の由来は花入の竹の割れを上記の弁慶の引き摺り鐘の割れに通わせたものということです。

狂女物の謡曲『三井寺』は鐘の能、月の能といわれています。

月の名所は数限りなくありますが、何れも池・湖・海など水場が付近にあるようです。三井寺には淡海[あふみ=琵琶湖]がありますね。

我が子千満を人商人[ひとあきびと=人買い]に連れ去られた母親は清水観音のお告げに導かれ三井寺へ赴きます。

三井寺では僧らが千満を伴い中秋十五夜の月見をしています。

そこへ物狂いとなった母親が笹を手にやって来ます。寺の僧たちを困らせながらも女人禁制の境内に入り込み、母親は戯れに寺の鐘をつきます。やがて狂女は正気にもどり、我が子に気がついて親子は連れ立って帰って行くという話です。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~